

研究紀要刊行にあたって

愛知県陶磁資料館

研究紀要

1

当館は、窯業界に関する総合研究施設として多様な目的を掲げて、昭和38年に開設、昭和44年に本館が開館しましたが、その間、窯業界の発展を促すべく、全窯業の発展を促すべく、研究紀要の出版を断念してまいりました。

本館の開設から幾多の年が過ぎ、窯業界としての発展をより一層活発なものとするため、ここに研究紀要を刊行することとした。

開設以来の集積であった本館には、資料だけでなく、当館で調査した研究結果も公表する場があります。その内容に統一性をもたせ、全窯業にわたる研究発表をいかに簡便に発表できるかという問題が考えられました。今後、改訂した内容をとり上げ、当館の刊行する研究紀要とする所存であります。今後は、窯業界にあり、窯業界の発展の促進の場とすることを目指しました。研究紀要に賛同を加えられたら、論文内容も大変な負担を伴う部分があるかと懸念します。しかし、学術界一人一人の目的的研究発表を促すため、本館の刊行が今後の窯業界の発展に大きな役割を担うことを信じてやみません。

本館の刊行にあたり、ご支援、ご協力いただきました各機関に感謝を申し上げます。また、本館の発展のため、ご支援、ご協力をお願いし、刊行のしつとお願いいたします。

昭和57年8月

愛知県陶磁資料館
館長 野田 文次郎

研究紀要刊行にあたって

当館は、陶磁器に関する総合研究施設という大きな目的を担って、昭和53年に南館、昭和54年に本館が開館しましたが、これまで主として特別展、企画展の実施をとおして当館の役割の一端を果してまいりました。

本館棟の開館から満3ケ年が過ぎ、研究施設としての活動をより一層活発なものとするため、ここに研究紀要を発刊することといたしました。

開館以来の懸案であった本冊子は、申すまでもなく、当館学芸員の研究成果を公表する場がありますが、その内容に統一性をもたせるため、企画展示にあわせた研究特集あるいは共同研究の成果といった掲載方法が考えられます。今後、逐次こうした内容を取り上げ当館の特色ある研究紀要とする所存ではありますが、今回は、第1号にあたり、学芸員全員の最近の研究成果の発表の場とすることにいたしました。原稿枚数に制限を加えたことから、論文内容も十分に意を尽せない部分があるかと思えます。しかし、学芸員一人一人の日頃の研鑽姿勢を良とされ、本紀要の発刊が今後の館活動の発展に大きな契機となることを信じてやみません。

本冊子上梓にあたり、ご支援、ご協力いただきました各位に謝意を表しますと共に、本紀要に対するご指導、ご批評をお願いし、刊行のことばといたします。

昭和57年3月

愛知県陶磁資料館

館長 新美富太郎

目 次

○ 尾張における平安末期の瓦生産 —— その分布と史的背景 ——	柴 垣 勇 夫 ……………	1
○ 初期中世窯にみる特殊器種構成 —— 常滑窯発生論への展望 ——	赤 羽 一 郎 ……………	12
〈研究ノート〉		
○ 美濃古窯研究小史	井 上 喜 久 男 ……………	24
○ 19世紀の瀬戸陶器	仲 野 泰 裕 ……………	33
○ 磁器の焼成と気孔	不 二 門 義 仁 ……………	43
〈調査報告〉		
○ 南山1号窯発掘調査報告	浅 田 員 由 ……………	52
〈資料紹介〉		
○ 建久8年書写法華経伴出の経塚出土資料	柴 垣 勇 夫 ……………	63
〈記 録〉		
○ 瀬戸(美濃)大窯の復元と焼成記録	学 芸 課 ……………	66
○ 復元大窯の焼成品について	加 藤 正 ……………	72